

## 歴史地図の読み取り

佐藤 正寿（東北学院大学）

### 1 歴史地図を読み取る視点

第6学年の教科書には、歴史絵画資料や想像図の他に、歴史に関する地理的事象を示した歴史地図が掲載されている。いくつかの例を紹介しよう。（令和2年度版『小学社会6』教育出版）

- ・「8世紀ごろの日本と世界のつながり」
- ・「源氏と平氏が戦った場所」
- ・「日本と東アジア各地との貿易」
- ・「日清戦争の戦場」「日露戦争の戦場」
- ・「アジア・太平洋への戦争の広がり」

これらは授業において重要な資料となっている。該当する内容に応じた範囲の地図にその当時の地名が記載され、進路や交通路といった内容が矢印や線で示されている。また、地図上の空間的な広がりを学習者が見やすいように、色分けされている。示されている情報を注意深く読み取っていく必要がある資料であるといえよう。

しかしながら、そのような歴史地図の特徴を教師がとらえきれず、「地図から気づいたことは何か」というような決まりきった発問で授業を進めていることはないだろうか。あるいは、「この歴史地図ではこのことを理解させようとしている」と一方的に教師が説明するだけになっていないだろうか。

今回はこの歴史地図をどのように教材研究し、どのような発話を行ったらよいのか考えたい。

### 2 4つの視点による歴史地図の教材研究

寺本（2012）は、地図は「点記号」「線記号」「面記号」「地名」の4要素で成り立っていると述べている。その4要素で歴史地図を見ていくと、以下の4つの視点が考えられる。

- ・点記号の視点…点として示された記号の意味と配置の傾向
- ・線記号の視点…矢印や線の記号の意味とその方向や結びつきの特色
- ・面記号の視点…面の意味と特色
- ・地名の視点…当時の地名と現在との違い

一つの具体例を示す。1937年に始まった中国との戦争に続き、日本はアメリカなどの連合軍とも戦争を始める。戦場は東南アジアや太平洋まで広がり、太平洋戦争に入っていく様子を表したのが、次ページの図1「アジア・太平洋への戦争の広がり」である。

ここには線記号として、2つの矢印（「日本軍の攻撃」「日本軍の空襲」）と1つの線（「日本軍の最大勢力範囲」）が示されている。キャプションにあるように「戦争の広がり」がキーワードであり、どのように戦争が広がっていったのかがこの線記号で示されているのである。

具体的に見ていくと、「日本軍の攻撃」の矢印が太平洋の島々や東南アジアに向いており、その方向を理解しやすい地図になっている。

その他に「日本軍の空襲」の矢印と「日本軍の最大勢力範囲」の線をあえて示しているのは、戦争の広がりについての空間把握をよりしやすくするためと考える。いわば面の視点からの把握である。

「日本軍の最大勢力範囲」を線で区切ることで、戦争がいかに広い空間で行われたかがわかる。その広さは日本軍が攻撃した範囲とほぼ一致し、現在の日本の領土・領海とは比べものにならない。また、その範囲の多くが太平洋に面した国々や島であることから、「太平洋戦争」という戦争の名称も理解できるであろう。

また、「日本軍の空襲」は最大勢力範囲から外側に向かっている。それらは連合国側からの反撃にあっている場所と考えられる。事実、この戦争で日本軍は、初めは勝利を重ねていたが、日本軍が占領した東南アジアや太平洋の地域には、やがてアメリカ軍が上陸し、激しい戦闘がくり広げられることになる。

他にも面記号の視点から見ると、朝鮮や台湾が日本と同じ色になっていること、満州国が他の国々と異なった色になっていることに気づく。これらの色分けにより、当時の日本の領土の広さを容易に理解できる。そして、それよりもさらに広範囲で戦争が広がっていることを他の色で把握できる。

なお、地名についても、東南アジアでタイが他の地名と異なるフォントになっている。日本や中国と同じようにタイは当時独立国であり、日本とタイは同盟を結んで戦争をしていた。また、点となるような記号はないものの、「日本軍の攻撃」の矢印の出発点は太平洋の島々（小さく見える）になっている。太平洋戦争で日本軍が南の島々を拠点にしていたことがうかがえる。

このように4つの視点で見ると、多くの情報が歴史地図で示されていることに気づく。

図1 「アジア・太平洋への戦争の広がり」  
 (『小学社会6』教育出版 p.205)



アジア・太平洋への戦争の広がり

### 3 具体的な発問

それでは、実際に上記の教材研究を生かした発問や指示はどのようにあればよいのだろうか。先の歴史地図について次のように考える。

#### (1) 基本的事項の発問

最初に資料の「題」と「記号（この場合には線と矢印）の意味」について、「題を読みましょう。」「赤い矢印は何を表しているのでしょうか。」「青い矢印は何を表しているのでしょうか。」といった発問や指示で確認する。「空襲」という言葉の理解が不十分な場合には、調べさせたり、教師から説明をしたりする。続いて、地図上に示された当時の日本の領土と満州国を指で押さえさせ、位置と広さを把握させる。これらが、資料の読み取りの前提となる基本的事項の理解となる。

## （２）線記号の視点からの発問

続いて、『**日本軍の攻撃**』は、**どこに向かっているのでしょうか。**と発問をする。日本軍の進路をたずねる発問である。国名や地域名の他に、「日本より南」「太平洋の島々」といった答えが出てくるであろう。同様に、『**日本軍の空襲**』は、**どこに向かっているのでしょうか。**と発問し、「日本軍の最大勢力範囲」よりも外側に向いていることに気づかせ、それは何を意味するか考えさせる。空襲はしたものの日本が占領できなかったところであり、日本軍の最大勢力範囲よりもさらに広く戦争が起きていたことを理解させる。そのうえで、「**戦争はどこまで広がったといえるか。**」と問い、東南アジア各地や太平洋といった広い範囲に日本軍の勢力が及んでいたことに気づかせ、この戦争が「太平洋戦争」であることを教える。

このような「どこに」「どこまで」を含んだ発問は、線記号の視点からの発問には欠かせないものである。

## （３）面記号の視点からの発問

さらに面記号の視点から考えさせることを意図して、「**日本の領土や満州国の広さと『日本軍の最大勢力範囲』を比べて気づいたことは何ですか。**」と発問する。子どもたちからは、「とても広い範囲に戦争が広がったことがわかる」「今の日本よりも当時の領土は大きいのに、さらに広い範囲で攻撃していることがわかる」といった反応が出てくるであろう。ここで改めて題の「アジア・太平洋への戦争の広がり」に着目させ、この題が地図の特色を適切に表現していることに気づかせる。このように面記号の視点では比較させることで気づきも深まる。

その他、点記号の視点からの確認として、教科書に掲載されている真珠湾の位置を教えたり、太平洋の島々が日本軍の攻撃の起点になっていることを確認したりして資料の読み取りを終える。

佐々木（2016）は歴史地図を活用するよさを4点述べており、そのうちの1つとして「地図上の矢印や国について隠された情報に目を向けることができる」ことを挙げている。教師自身が線記号や面記号といった視点から、歴史地図の情報を深く教材研究し、その教材研究に基づいた発問や指示をすることで、子どもたちも歴史地図の読み取りの視点をもつことができるようになると考える。

### ※引用文献

- ・寺本潔(2012)『思考力が育つ地図&地球儀の活用』（教育出版）
- ・佐々木豊(2016)「歴史地図と情報をつなぐ板書「なぜ日本は太平洋戦争で東南アジアに進出したのだろうか」」『社会科教育』2016年12月号（明治図書）